

# 植物に関係する分野の学生にみる好きな花, 嫌いな花とそのイメージ

山本俊光<sup>1</sup>・松尾英輔<sup>2</sup>

九州大学大学院農学研究院 812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

<sup>1</sup> 久留米学園高等学校 <sup>2</sup> 九州大学名誉教授

## Flower Preference, Ranking, and Showiness Classification by Undergraduate Students from Plant-Related Laboratories

Toshikou YAMAMOTO<sup>1</sup> and Eisuke MATSUO<sup>2</sup>

Laboratory of Applied Plant Science, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Fukuoka 812-8581, Japan

<sup>1</sup> Present address: Kurume Gakuen High School <sup>2</sup> Professor Emeritus, Kyushu University

### Summary

Three hundred and ninety five undergraduate students (176 men and 219 women) studying in plant-related laboratories listed up-to three flowers which they liked and flowers which they disliked. All respondents described liked flowers, but only 40% of respondents listed 1-3 disliked flowers.

All listed flowers were then evaluated by a majority of the same students (161 men and 190 women) based on degree of showiness from Tanjun-soboku (simple, plain, humble) to Gouka-hade (gorgeous, showy) on a scale of 1 to 5 (Tables 2 and 3). Among the liked flowers, those which were evaluated as gorgeous-showy by over 10% of respondents were sunflower, cherry-blossom, tulip, rose, gerbera and lily. Baby's-breath and cosmos were the only ones which were evaluated simple-plain. Among the disliked flowers listed the rose was the only one evaluated gorgeous-showy by over 5% of respondents, while the chrysanthemum and lycoris were evaluated simple-plain (Tables 1 and 2).

The number of species were similar on each scale for liked (average 37) and disliked (average 27) (Table 3) while total number of species listed were greater in the gorgeous-showy category compared to the simple-plain category for both liked flowers (329 vs.143) and disliked flowers (55 vs. 37).

Among the liked flowers, 39% of respondents listed only gorgeous-showy flowers (5, 4), 19% listed only simple-plain flowers (2, 1), and the remaining 42% listed both gorgeous · showy ones and simple-plain ones or only neutral ones (3) (Table 4). Of the disliked flowers, 48% percent of respondents listed only gorgeous-showy flowers, 28% simple-plain ones and the remainder (23%) listed both gorgeous-showy flowers and simple-plain flowers (mixed-disliked type) or only neutral ones (Table 4).

Further analysis was conducted to determine any apparent interaction between liked and disliked groups based on the preferences within each group. The data is being reported based on the type of disliked flower reported (Table 5). Of the 137 respondents who listed any disliked flowers 51 were in the group who liked only gorgeous-showy flowers, 60 were in the group who liked a mixture of both showy and plain flowers or neutral ones, and 26 were in the group who liked only simple-plain flowers. Of the 51 who only liked gorgeous-showy flowers, 45% listed only gorgeous flowers as being disliked, 31% listed only simple-plain flowers as being disliked and 24% listed a mixture of both or only neutral ones. For the 60 who liked a mixture of both types of flowers and the 26 who liked only simple-plain flowers the greatest per cent of the disliked flowers they listed were gorgeous-showy (47% and 58% respectively).

These results suggested that undergraduate students have a preference for gorgeous-showy type flowers compared to simple-plain among the flowers that they like.

### はじめに

花と人間とのかかわりは古く、すでに数万年前、ネアンデルタール人は死者に花を手向けたことが報告されて

2003年6月3日受付。2003年9月4日受理。

本報は人間・植物関係学会2003年大会(恵泉女学園園芸短期大学)において発表した。

いる(Solecki, 1975)。花とのかかわりの中で花の好き嫌いやイメージは、昔から人々の関心事であった。

たとえば、花は、歌や花言葉に言葉の代弁者として用いられてきたが、そのイメージに込められた意味は重要であったし、現在でも式典やショーウィンドウでの花の活け込みでは、主催者の目的や意図を花のイメージに託

して伝えている。また、プレゼントに用いるときは、相手の好きな花を贈ろうとする。最近では、園芸療法の場で花を取り扱うことが多くなってきているが、好きな花であれば園芸に対する被対象者の関心は高まるであろうが、嫌いな花では逆に拒否反応を招く恐れもある。

俗に花を嫌いな人はいないといわれるが、個々に尋ねると嫌いな花を答える人もいる。その嫌われる花はどんな花で、どんなイメージのものであろうか。また、好きな花を尋ねると比較的容易に回答が得られるが、その花はどんな花で、どんなイメージのものであろうか。

花の好き嫌いに関する調査は、歳森(1983)、今西・米澤(1988a,b)、今西(1989,1990,1991,1994)、今西ら(1992)、弟子丸(2002)によって行われているが、これらの調査のほとんどは記述された花の中から選ぶ、あるいは記述された花の好き嫌いを答える方式がとられている。

ところが、これらの方法では、調査者が抱いたイメージで選ばれた花によって私たちの好きな花や嫌いな花のイメージが作られることになりかねない。たとえば、調査者の「簡潔、清楚」「野の花の雰囲気を持った」や「威厳のある」といった花のイメージは被調査者のそれとは違う可能性もある。

つまり、花の好き嫌いとその花のイメージを判断するには、好き嫌いを答えた回答者自身にその花のイメージを尋ねるのが適切であると考えられる。なぜなら、花の好き嫌いは回答者の経験に基づく何らかのイメージで判断されているとみられるからである。

以上のようなことから本研究では、好きな花、嫌いな花をあげた当人にその花に対するイメージを回答してもらい、どんなイメージの花が好まれ、あるいは嫌われているかを、派手・豪華ー単純・素朴という観点から探ることを目的とした。

### 調査方法とまとめ

1995年から2002年にかけて、395名の学生(男性176名、女性219名)を対象とした。学生が所属する大学(延べ9校)・短大(延べ2校)の内訳は、九州圏内の大学が延べ9校、中部地方の大学が延べ2校である。四年制大学の対象学生は、植物に関係する学部や学科(農学、造園、園芸、技術)の専門課程にいる2~4年生、短大(造園、食物栄養)の学生は1,2年生(すでに1年生でも専門科目を学んでいる)であった。

これらの学生に好きな花と嫌いな花をそれぞれ三つまで記述させた。この際、それらが無い場合は記述する必要がないことを付け加えた。

次に回答者によって記述されたこれらの花の一覧表をつくり、それらに対してどんなイメージを持っているかを前回と同じ学生に尋ねた。

イメージの評価指標はさまざまであるが、今回はもっ

とも身近な話題となり、回答が容易と考えられる豪華・派手ー単純・素朴という指標を用いた。これを5段階に分け、それぞれの花をどの段階で評価しているかを尋ねた。この際、知らない花には回答する必要がないことを付け加えた。

回答時間は、第1回目の好きな花、嫌いな花の記述には、予備調査で書き終わるまでの時間を調べ、それぞれ3分以内とした。第2回目(第1回目に記述された花のイメージ評価)の回答時間は、回答者の数によって記述された花の数が異なるので所要時間は違ってくるが、学生の様子を見ながら最大10分とした。

第1回目の回答者のうち第2回目の評価も行ったのは、男性161名、女性190名であった。なお、第2回目の調査は、原則として第1回目の調査のあと1週間以内に行われた。

取りまとめにあたり、好きな花の種類と記述人数、ならびに嫌いな花の有無と種類および記述人数については第1回目の回答者395名、好きな花、嫌いな花のイメージ評価については、第1回目に花名を記述し第2回目の評価も行った351名の回答をもとに取りまとめた。

## 結 果

### 1. 好きな花と嫌いな花の種類とイメージ

#### 1) 好きな花と嫌いな花

まず、第1回目の調査で、好きな花については、395名全員が何らかの花を回答した。

一方、嫌いな花については、まったく記述しなかった回答者が238名(60%)、嫌いな花を1個記述した回答者109名(28%)、2個記述した回答者24名(6%)、3個記述した回答者24名(6%)であった。これを男女別にみると、男性では、記述なしは101名(57%)、嫌いな花を1個記述した回答者48名(27%)、2個記述した回答者13名(7%)、3個記述した回答者14名(8%)であった。これに対して、女性では記述なしは132名(60%)、嫌いな花を1個記述した回答者60名(27%)、2個記述した回答者16名(7%)、3個記述した回答者11名(5%)であった。

記述された好きな花の種類数は154、嫌いな花の種類数は78であった。

好きな花154種類のうち、10%以上の回答者が記述した花は、男女合計では上位からヒマワリ(29%)、サクラ(27%)、チューリップ(26%)、バラ(19%)、カスミソウ(15%)、コスモス(14%)、ガーベラ(13%)、ユリ(10%)、の8種類であった(第1表)。

男女別にみると、男性が好きな花は、1位サクラ、2位ヒマワリ、3位バラ、以下チューリップ、コスモスであり、女性が好きな花は、1位チューリップ、2位ヒマワリ、3位カスミソウ、以下ガーベラ、サクラであった。明らかに女性より男性が好きな割合の高い花はサク

Table 1. Top eight liked and disliked flowers listed by undergraduate students.

Item	Order	Flower	Total N=395	Men N=176	Women N=219
Liked flower	1	Sunflower	29(%)	32(%)	26(%)
	2	Cherry-blossom	27	35	20
	3	Tulip	26	17	34
	4	Rose	19	19	20
	5	Baby's-breath	15	7	21
	6	Cosmos	14	13	16
	7	Gerbera	13	3	21
	8	Lily	10	13	8
Disliked flower	1	Rose	7	11	5
	2	Chrysanthemum	7	7	6
	3	Lycoris	5	3	6
	4	Garden pansy	3	3	3
	5	Lily	2	2	2
	6	Rafflesia	2	3	2
	7	Marigold	2	1	3
	8	Common cockscomb	2	1	2

ラであり、男性より女性が好きな割合の高い花は、チューリップ、カスミソウ、ガーベラであった。

嫌いな花は、全部で78種類あったが、記述頻度は一般に低かった。たとえば、5%以上の回答者が記述した花は、バラ(7%)、キク(7%)、ヒガンバナ(5%)の3種類のみである。そこで、好きな花と同様に8種類を挙げてみると、以下パンジー、ユリ、ラフレシア、マリーゴールド、ケイトウとなった(第1表)。男女の違いは、好きな花ほど顕著ではなかった。

## 2) 好きな花と嫌いな花のイメージ

好きな花、嫌いな花を記述した人たちが、その花をどう評価しているかをみると、好きな花、嫌いな花ともにバラなど一部を除いて指標のどの段階にも評価がなされており、その評価した人数の多少は多くの花で偏りがあった。そこで、豪華・派手から単純・素朴までを5~1にランク付けして、平均値と標準偏差を割り出した。

その結果、好きな花では、上位8種類の平均値は、バラがもっとも高く(4.9)、以下ヒマワリ(4.2)、ユリ(4.1)、ガーベラ(3.9)、サクラ(3.6)、チューリップ(3.3)、コスモス(2.5)、カスミソウ(1.9)となった。標準偏差は、バラがもっとも小さく0.4で、サクラはもっとも大きく1.3であった(第2表)。

嫌いな花上位8種類の平均値をみると、バラ(4.9)、ユリ(4.1)、ラフレシア(4.0)、パンジー(4.0)、マリーゴールド(3.4)、ケイトウ(3.4)、キク(2.7)、ヒガンバナ(2.7)となり、標準偏差はバラが0.4と小さいが、キク(1.3)、ヒガンバナ(1.3)は大きかった(第2表)。その他の花は、記述数が少ないためより大きな値になっているものが多い。

次に、好きな花、嫌いな花として記述された各花を各人が評価した第2回目の回答をもとに5段階評価別にまとめたのが第3表である。

同じ花でも回答者によって評価が異なる。そこで、各

Table 2. Image and value (number of respondents) of top eight liked and disliked flowers.

Item	Flower	Gorgeous ← → Simple					Mean	Standard deviation
		5	4	3	2	1		
Liked flower	Rose	61	6	1	0	0	4.9	0.4
	Sunflower	50	33	12	2	6	4.2	1.1
	Lily	14	11	4	1	2	4.1	1.1
	Gerbera	11	15	12	1	0	3.9	0.8
	Cherry-blossom	31	25	17	13	7	3.6	1.3
	Tulip	4	36	29	13	4	3.3	0.9
	Cosmos	2	8	16	18	9	2.5	1.1
	Baby's-breath	1	3	8	18	23	1.9	1.0
Disliked flower	Rose	23	4	0	0	0	4.9	0.4
	Lily	3	2	4	1	0	4.1	1.3
	Rafflesia	4	0	1	0	1	4.0	1.7
	Garden pansy	3	2	3	0	0	4.0	0.9
	Marigold	1	1	2	1	0	3.4	1.1
	Common cockscomb	1	2	1	0	1	3.4	1.5
	Chrysanthemum	1	7	6	2	7	2.7	1.3
	Lycoris	1	3	3	3	3	2.7	1.3

**Table 3.** Numbers (%) of liked and disliked flower species (upper) and those of sum of evaluations (lower) by respondents.

Item	Taste	Gorgeous ←					→ Simple	Total Numbers (%)
		5	4	3	2	1		
Numbers of flower species	Liked flower	48 (31)	55 (36)	52 (34)	59 (38)	51 (33)	154 (100)	
	Disliked flower	17 (22)	23 (29)	21 (27)	22 (28)	24 (31)	78 (100)	
Numbers of sum of evaluations	Liked flower	239 (25)	226 (23)	195 (20)	166 (17)	143 (15)	969 (100)	
	Disliked flower	55 (29)	38 (20)	34 (18)	27 (14)	37 (19)	191 (100)	

評価にいったい何種類の花があるか、記述された全種類の中でそれがどのくらいの割合 (%) になるかを上段に示した。

その結果、好きな花では、豪華・派手～単純・素朴の各評価に占める花の種類数に大きな差はなかった (31～38%)。嫌いな花の種類数についても、豪華・派手は22%とやや少なかったが、そのほかは27～31%とほぼ同様の値を示した。

次に、各々が記述した花をどう評価したかを延べ人数で調べた (第3表下段)。回答者は、3個ないしは1, 2個の好きな花、嫌いな花を記述したので、そのすべての記述植物に評価は与えられる。そこで、その全記述延べ人数 (全評価数) のうち、各評価にいったい何人が評価していたかを示したのが記述延べ人数である。なお、その割合を全記述延べ人数に対する割合 (%) で示した。

その結果、好きな花では、豪華・派手が25%、やや豪華・派手が23%に対して、やや単純・素朴は17%、単純・素朴は15%と派手気味の評価が高かった。嫌いな花でも、豪華・派手が29%、やや豪華・派手が20%に対して、やや単純・素朴は14%、単純・素朴19%と派手気味の評価が高かった。

## 2. イメージからみた花の好き嫌い

回答者は、どのようなイメージの花を好み、あるいは嫌うのであろうか。ここでは、記述された花のイメージが豪華・派手側ばかりのものか、単純・素朴側ばかりのものか、それとも両者を含んでいるかという嗜好の偏りをみた。

まず、回答者の嗜好の偏りをみるために、豪華・派手、やや豪華・派手の花ばかりを記述した人を派手 (好き、嫌い) 型、反対に単純・素朴、やや単純・素朴な花ばかりを記述した人を素朴 (好き、嫌い) 型、派手気味の花と素朴気味の花の両方を記述した人を派手・素朴 (好き、嫌い) 型と名付けて分類した。回答者の評価の中に「普通」が含まれている場合には、「普通」を除いて前述の基準に則って判定し型を決めた。1～2個しか記述していない場合も前述の方法で判定した。なお、回答者の評価が「普通」ばかりの場合は、派手・素朴 (好き、嫌い) 型とした。

その結果、好きな花については、派手好み型が39%、派手・素朴好み型が42%、素朴好み型が19%であった (第4表上)。男女別にみると、男性では、派手好み型が43%、派手・素朴好み型が41%、素朴好み型が16%

**Table 4.** Percentage of respondents in each of three groups with respect to flower preference.

Item	Groups of taste	Total	Men	Women
Liked flower	Gorgeous-likable group	39	43	36
	Mixed-likable group	42	41	42
	Simple-likable group	19	16	22
	Total respondents who listed liked flowers (N)	351	160	191
Disliked flower	Gorgeous-dislikable group	48	48	49
	Mixed-dislikable group	23	27	19
	Simple-dislikable group	28	25	32
	Total respondents who listed disliked flowers (N)	137	68	69

で、女性では、派手好み型が36%、派手・素朴好み型が42%、素朴好み型が22%であった。

嫌いな花についてみると、派手嫌い型は48%、派手・素朴嫌い型は23%、素朴嫌い型は28%であった (第4表下)。男女別にみると、男性では派手嫌い型が48%、派手・素朴嫌い型が27%、素朴嫌い型が25%で、女性では、派手嫌い型が49%、派手・素朴嫌い型が19%、素朴嫌い型が32%であった。

次に、嫌いな花を記述した回答者について、好きな花の型と嫌いな花の型との関係を調べたのが第5表である。嫌いな花を記述した人が少ないので厳密なことはいえないが、好きな花の型のいかにかわらず、派手嫌い型がもっとも高く、派手好み型では45%、派手・素朴好み型では47%、素朴好み型では58%であった。これに対して素朴嫌い型は、派手好み型で31%、派手・素朴好み型で32%、素朴好み型では15%であった。

Table 5. What type of flowers were listed as disliked flowers by each groups of liked flower type?

Groups of liked flower	Total numbers of respondents who listed flowers N	Groups of disliked flower		
		Gorgeous-dislikable	Mixed-dislikable	Simple-dislikable
		%	%	%
Gorgeous-likable	51	45	24	31
Mixed-likable	60	47	22	32
Simple-likable	26	58	27	15

## 考 察

### 1. 好きな花と嫌いな花の種類とイメージ

一般に好きな花、嫌いな花は印象に残るので、記入されている花から選ぶよりも、回答者に記述させる方がよりの確に好き嫌いを明らかにできるものと考えられる。

今回、回答した学生についてみると、必ずしも3個記述したわけではないが、すべての人が好きな花を記述した。これに対して、嫌いな花を記述した学生は40%であった。とくに、後者の数値は興味深い。というも、俗に花の嫌いな人はいないといわれるが、40%の人が何らかの嫌いな花をもっていることを示しており、花の嫌いな人はいないという表現を一般的に使ってよいかどうか疑問が残るからである。

好きな花に関する歳森(1983)、辰濃(1989)、今西(1991)、弟子丸(2002)の報告によると、サクラ、キク、ユリ、カスミソウ、コスモス、バラ、チューリップ、ヒマワリなどが上位にランクされている。

本調査(第1表)でも、これらの花は、キクを除いて10%以上の回答者が記述しており、このほかにガーベラも記述されていた。上述の報告が今回のような20歳前後の若者ではなく、一般社会人を主な対象とした結果であることを考えると、これらの花々は、広い年代層に受け入れられているとみることができよう。

花の嗜好の男女間差については、今西(1994)が、男性はサクラを、女性はチューリップ、カスミソウを好むと報告している。本調査で10%以上の回答者が記述した8種類についてみると、ヒマワリのように記述した男女の割合がほぼ同じ花もあるが、サクラは男性の方が、チューリップ、カスミソウ、ガーベラは女性の方が好む割合が高く、これらは、それぞれ男性、女性が好む花とみることができる。

男女で好む花に違いがでる理由として、植物のもつ容姿、触感、色、香りなどの特徴が関係することも考えられるため、どの特徴が男女の好みの違いになるのかなどについてはさらに調査が必要であろう。

上位8種類の花の評価を数値化して平均値を求め、イメージ別に分類すると(第2表)、バラのように派手・豪華なものからカスミソウのように単純・素朴なものまでさまざまであることは理解できるが、興味深いのは、花によってイメージ評価の幅が著しく異なることである。

たとえば、バラのように大多数が同じような評価を与えるものもあれば、サクラのようにイメージ評価が著しくばらつくものもある。いずれかといえば、ばらつきの大きいものが多い。これは、花、とくに園芸種には大きさや色の異なる品種が多く、回答者がどんな花をイメージしたかによって評価が異なってくるためであろう。

すなわち、回答者の育った環境や見てきた品種、どんな花の姿を好きになったかなどが評価に関係するとみられる。たとえば、チューリップの場合、昔から親しまれているのは、赤・黄・白の一重咲き品種であったが、最近では、矮性型、八重咲き、花型の変異、さらに多彩な花色など、色や姿が変化に富んでいる。本調査では、やや豪華・派手、普通といった評価が多いが、豪華・派手から単純・素朴まで評価はばらついており、どんなチューリップをイメージして評価したかは定かではない。

また、サクラの場合もそのばらつきは大きかった。大部分の人が思い浮かべるのはおそらくソメイヨシノであろうが、花の一つ一つをイメージするか、それとも樹全体が満開になっている状態をイメージするかによっても評価は異なってくるであろう。工藤(1996)は、イメージスケール法によるサクラのイメージは、フォーマルからエレガント、ロマンティックまで幅広いとしているが、いずれにしても、サクラのイメージの持つ多面性が示唆されている。

キクは、1979年のNHK調査(NHK世論調査所編)では好きな花の第1位であった。ところが、今回の調査では、好きな花として記述した人は少なく、むしろ嫌いな花としてバラに次ぐ2位となっている。なぜこのように嫌われる地位に甘んじるようになったのだろうか。

実は、そのNHK調査(1979年)でも、若年層より年代が上がるにつれキクを好む割合は上がることが指摘されていた。辰濃(1989)によると、中高年齢層でキクの支持率が高いのは、キクの持続する生命力や野菊にみる可憐さや優しさが好まれるためである。ところが、高校生を対象とした調査によると(山本、未発表)、暗い気持ちになる、さみしくなる、葬式を思い出すからというのがキクを嫌う理由となっている。ここでも、好きとするキクと嫌いとするキクの品種や色、姿に違いがあることが示唆される。

歳森(1983)は昭和2ヶタ生まれの前後でキクの

好き、嫌いの変化が生じているとしているし、今西ら(1992)によると、若い人はキクを嫌うが、年代が上がるにしたがって好む割合が高くなる。

以上のように、キクは、すべての年代で嫌われているわけではないが、とくに若い世代では、暗い、あるいは葬式花といったイメージを持たれ、快く思われていない。これは、キクの普及、用途の変化などが世代によるイメージの違いを生じさせていることを示唆する。したがって、キクが若い世代に嫌われないようにするには、前述の暗い、あるいは葬式花といったイメージを一新する用い方が肝要であろう。

回答者によって記述された好きな花、嫌いな花が、記述者自身によってどのように評価されているかをみると、評価段階別の種類数ではほとんど差異は認められない(第3表上)。

しかし、記述延べ人数については、好き、嫌いのいずれについても豪華・派手、やや豪華・派手と評価する割合と単純・素朴、やや単純・素朴とする割合を比べると、明らかに前者の方が高い(第3表下)。

以上のように、花には、はなやかで、派手な感じや豪華でリッチな感じよりやさしい感じ、清楚・質素な感じを求めるとする今西(1991)の報告とは異なり、今回の調査では、明らかに派手好みの傾向がみられた。

嫌いな花では、歳森(1983)、今西ら(1992)が示した代表的な嫌いな花のうち、バラ、キク、ヒガンバナ、ケイトウは本調査でも上位にあがっていたが、ダリアを記述した回答者は少なく、グラジオラスを記述した回答者はなかった(第1表)。

また、嫌いな花では、好きな花と違って全般的に記述する回答者の割合が低かった。上位のバラ、キクをみても好きな花のヒマワリ、サクラの4分の1程度しかなく、1~2人の回答者のみが記述した花は、78種類中57種類(73%)と圧倒的に多かった。好きな花と嫌いな花を記述した人数と種類との関係を見ると、100人あたりの種類数は好きな花50に対して嫌いな花39であり、種類あたりの延べ記述数は逆に前者2.9に対して後者7.2であった。これらのことから、好きな花は、いくつかの花に集中する傾向がみられるのに対して、嫌いな花では特定の花に集中する度合いは低くなるといえる。

これらの結果は、好きな花は比較的共通しているが、嫌いな花は個人によって異なることを示唆している。

今西ら(1992)は、人工的な感じ、濃い色で目立つ、大振りな重い花が好まれない花のイメージとしているが、確かに上位にあがっている花をみると、花の大きさだけが目立つ、花の色が強烈である、独特の香りがあるなどの特徴をもつものが多い(第1表)。しかし、上位ではないが、ブタクサのようなアレルギーに関係する植物もあげられており、個人の経験が嫌いな花を作り出す可能性を示唆している。

これまでは、花を嫌いという人はないといわれ、花は万人に好かれる無難なものであるととらえられがちであった。しかし、本調査で示されるように、40%もの回答者が嫌いな花を記述している事実は興味深い。しかも、嫌いな花は人それぞれに違うことが示唆される。最近のように、花を見かける場が多くなり、しかも外国からの導入花を含めてその種類が著しく増えてくれば嫌いになる体験を持つ機会も増えると考えられる。

好きな花、嫌いな花の取り扱い実用の場合でも注目される。とくに園芸療法などで活用する場合には、万人が花好きであるというよりも個々にみれば嫌いな花はあるという認識が不可欠である。つまり、園芸療法を行う際、取り扱いやすい花を療法に使うのはもちろんだが、少なくとも被対象者の嫌いな花を療法に使わないように心がける配慮が必要となろう。

## 2. 記述された好きな花、嫌いな花を通してみる 若者の花の嗜好

華道においては、「枝葉があるから花も生きる」という言葉があり、墓花では、花と緑の枝葉を組み合わせる供える割合が7割になる(松尾, 1989)というように、日本人は、豪華・派手、単純・素朴のバランスを重視する美意識を持つことが読み取れる。

しかし、最近では、暮らしの至るところで派手さが目立つようになり、花にも豪華・派手なものが多く見かけられるようになってきた。今回の調査では、20代前後の学生の心にそういうバランス感覚がみられるかどうかに関心の一つであった。というのは、Matsuo(1990)は、好みの花を分析すると、派手・素朴好み型が多いことを報告しているからである。

しかしながら、本調査の結果(第4表上)からは、現代の学生は、派手気味の花を好む傾向が強いことをうかがうことができる。積極的な性格の人は消極的な性格の人よりも「はなやかで、派手な感じ」「豪華でリッチな感じ」をより強く求めるといわれる(今西, 1990)が、もしそうだとすれば、今の若者には積極的な人が増えているということになるだろうか。

次に、記述者は少ないが、嫌いな花について好きな花と同様に、回答者のイメージによって派手嫌い型、素朴嫌い型、派手・素朴嫌い型に分類してみると(第4表下)、派手嫌い型が明らかに多い。これは、第3表にあるように、嫌いな花全体の傾向であるばかりでなく、個人の段階でも派手気味の花を嫌いとする傾向があることを示している。

また、好きな花型と嫌いな花型とは何か関係があるのだろうか。本調査では、嫌いな花を記述した人について、好きな花の型との関連を探ってみた(第5表)。嫌いな花を記述した人が少ないので断定的にはいえないが、ほぼ次のような傾向はみられる。すなわち、派手好

みの人は、素朴好みの人に比べると素朴嫌いであり、素朴好みの方は、派手好みの方よりも派手嫌いである。予想されることではあるが、ある程度、数字のうえでそのような傾向が読み取れる結果が得られた事実は特筆できよう。

### 摘 要

植物に関係する学生に好きな花と嫌いな花をそれぞれ三つ以内記述させたところ、全員が好きな花を記述したが、嫌いな花を記述したのは40%であった。

回答者の10%以上が記述した好きな花は、上位から派手気味なものではヒマワリ、サクラ、チューリップ、バラ、ガーベラ、ユリ、素朴気味なものではカスミソウ、コスモスであった。これらのうち、明らかに男性の好みが高かったのはサクラ、女性のそれは、好きな花の順位の高いものからチューリップ、カスミソウ、ガーベラであった。

回答者が記述した上位8位までの嫌いな花は、上位から派手気味なものではバラ、パンジー、ユリ、ラフレシア、マリーゴールド、ケイトウ、素朴気味のものではキク、ヒガンバナであった。

花のイメージは、派手・豪華気味から単純・素朴気味まで花によって異なる評価を受けたが、バラのようにばらつきの小さいものからサクラ、キクのように大きいものまでさまざまであった。

好きな花として記述された割合は派手気味の花が素朴気味の花よりも高く、嫌いな花として記述された割合も派手気味の花が素朴気味の花よりも高かった。つまり、派手気味の花は、好まれると同時に嫌われる傾向がみられた。

また、派手ばかり、素朴ばかり、派手・素朴両方の花を好むという人たちのいずれも、派手な花を嫌う割合が高かった。また、派手な花ばかり好む人は素朴な花を嫌う割合が高く、素朴な花ばかり好む人は派手な花を嫌いとする割合が高かった。

### 謝 辞

英文の校閲をいただいたD. Relf 教授（バージニア工科大学）とM. Burchtt 教授（シドニー工科大学）に深謝の意を表します。

### 引用文献

- 今西弘子・米澤富士雄. 1988a. 花と人とのかかわり. 新花卉 137: 57-60.
- 今西弘子・米澤富士雄. 1988b. 花と人とのかかわり(2). 新花卉 139: 80-85.
- 今西弘子・米澤富士雄. 1989. 花と人とのかかわり(3). 新花卉 142: 68-72.
- 今西弘子. 1990. 花と人のかかわり(4). 新花卉 146: 60-71.
- 今西弘子. 1991. 花と人のかかわりに関する調査研究. 学位論文.
- 今西弘子・米澤富士雄・今西英雄. 1992. 花に対する花店利用者の意識. 園学雑. 60(4): 981-987.
- 今西弘子. 1994. 花と人とのかかわり(6). 新花卉 163: 68-74.
- 工藤 忠. 1996. 好きな花とそれを選んだ理由から. 花卉懇談会設立10周年記念誌: p. 63-64.
- 松尾英輔. 1989. 墓花に関する研究. 鹿児島大学学術報告 39: 309-318.
- Matsuo, E. 1990. Analysis of flower appreciation and its international comparison contribute to progress of flower production and international flower trade. HortScience 25(12): 1468-1470.
- NHK放送世論調査編. 1979. 日本人の県民性－NHK全国県民意識調査. (日本放送出版協会, 東京). p. 90-91.
- Solecki, R. S. 1975. Shanidar IV, a neanderthal flower burial in northern Iraq. Science 190(28): 880-881.
- 辰濃和男. 1989. 天声人語9. 朝日文庫. (朝日新聞社, 東京). p. 265-266.
- 弟子丸元紀. 2002. 花を介した対人関係の深まりと心の癒し・安定. p. 91-97. 花卉園芸大百科 6. (農文協, 東京).
- 歳森 茂. 1983. 花の嗜好と意識に関する考察. 香川大学教育学部研究報告II 33: 39-60.